慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮古島の祭祀歌謡からみた女神
Sub Title	Goddesses of mythological music on Miyako Island
Author	上原, 孝三(Uehara, Kozo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.26 (2001. 4) ,p.75- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20010430-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮古島の祭祀歌謡からみた女神

上　原　孝　三

1.　はじめに

宮古諸島の神行事は，近年急速に消滅あるいは形骸化の傾向にある。その大きな要因には近代合理主義に基づく経済の発展，それに伴う前近代の社会生活基盤の崩壊，更には社会・個人の価値基準の多様化，教育環境の変化等があると思われる。無論，問題はそれだけに還元されるものではなく，シィマ（村）そのものと個人にも問題は内在する。村の神役とシィマビトゥ（村人）との両者の神行事に関する意識のズレ。あるいは神役に選出されたにも関わらず，それを引き受けず拒否する現象が宮古各地にみられるのである。社会・村・家庭・個人レベルでのいろいろな問題が複雑に絡み合い，神行事がスムーズに行なえないようになっているのが現状であろう。社会変化に伴う当然の帰結との見解からすると説明は容易であるかにみえる。だが，事はそう単純ではない。村の神行事は，伝統の遵守と変革の狭間を振子のように往還運動を行ない，最終的には神行事の終焉を迎えようとしているようだ。

神行事が消滅した村は現在どうなっているのであろうか。過去と現在の変化の相違は有るのかないのか。また，神行事を継続しているシィマとそうでないシィマとの相違は有るのかないのか。もしあるとすれば，何が違うのかを検討する必要があるのではないか。

だが少なくとも，神行事が伝統的な民俗宗教であるからには，そこには（人々には）何らかの宗教精神があるはずである。神行事を代表とする伝統的な民俗宗教が解体・消滅すれば，時間の程度の差はあれ，いづれ人々の民俗宗教精神もなくなるであろう。心の拠り所であった宗教がなくなれば，人の心根は元のそれとは異なるのは道理である。

伝統的な神行事の終焉を迎えようとしている現在ではあるが，かつてあるいは今に至ってもなお神行事の中心的存在・象徴はカミ（神）であろうと思われる。祭祀歌謡は神行事

（祭祀）のなかで，唱えられたり謡われたりする。本報告では宮古島の狩俣の祭祀歌謡にみえる女神について触れてみたい。

2. 宮古島狩俣村落の概要

沖縄県は，アジア大陸の東側，日本本土の南西に位置し，48の有人島を含む大小約160の島々からなる島嶼県である。これらのほとんどの島の周囲には裾礁タイプの珊瑚礁が発達し，台風時には天然の防波堤ともなり，また一方では魚・貝・海草など生活の糧を得る漁場ともなっている。

沖縄は地理的には，沖縄諸島，宮古諸島，八重山諸島，大東諸島などに区分される。宮古諸島は，6つの行政区に分かれており，県総人口の4.3％に相当する約51,000人が住んでいる。全島が隆起珊瑚礁起源を主とする新しい石灰岩でほぼ被われていて地表水は乏しい。しかし，地下水は豊富で，日本でも珍しい地下ダムを建設して農業用水に活用している。

狩俣は宮古島の北端に位置し，行政的には平良市に属する。平良市の市街地からは，13.5キロメートル程離れている。1999年3月現在，人口800人，世帯数283戸。宮古では比較的規模の大きい村落の一つである。主な生業として，さとうきび，葉たばこを中心とする農業と，もずく養殖，珊瑚礁海域での漁業とを営む宮古でも古い村落の一つである。

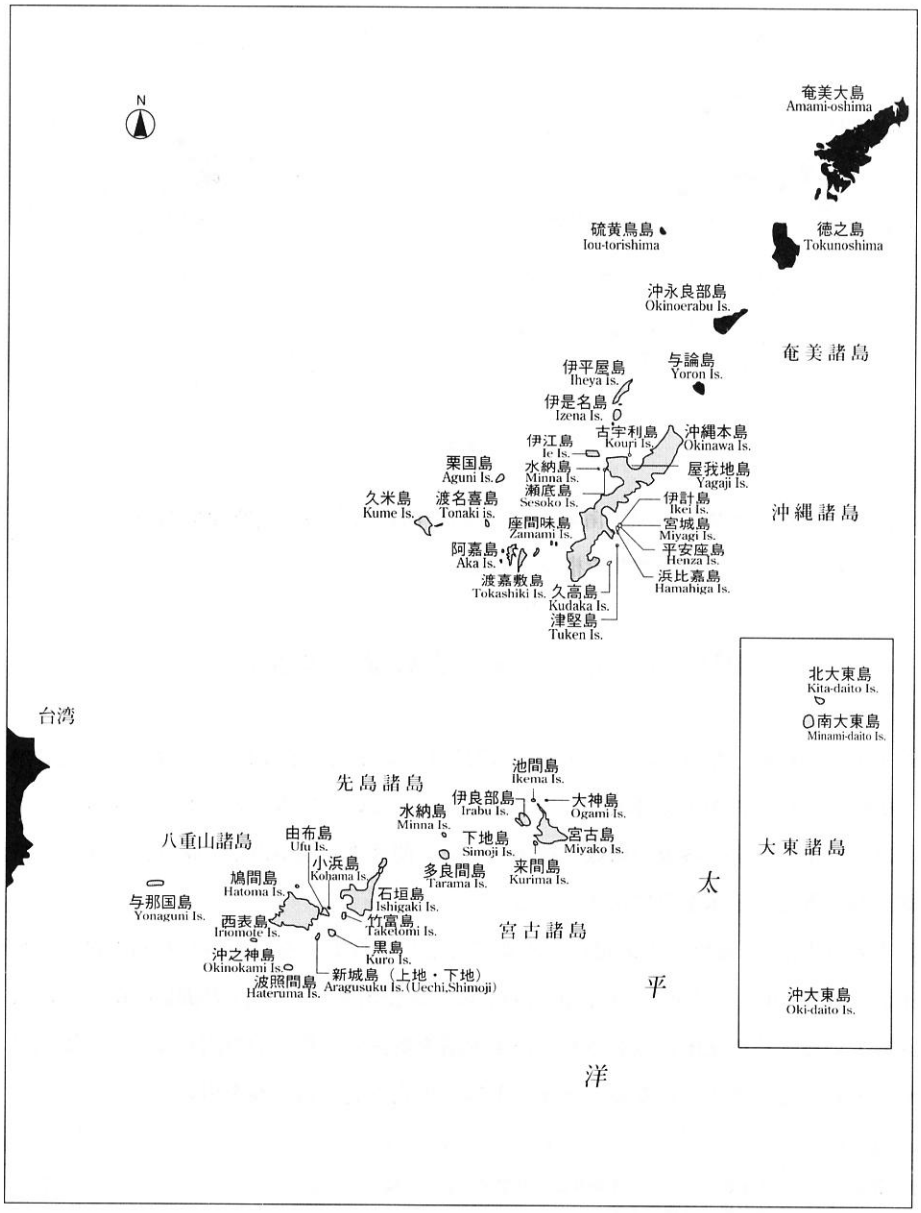
狩俣集落の周りはかっては石垣で囲まれていたという。居住空間が野面積みの石垣で囲まれていたのである。このような村落形態は宮古でも珍しく，居住空間が固定されていたということは，村落移動があまりなかったことを意味しよう。

集落の北側は海抜50メートル程の小高い丘陵地帯となっているので，東・西・南側を石垣で囲み生活を営んでいた。石垣と丘陵で囲まれた所をミャーク（宮古。現在たいてい宮古の漢字を当てる）という。現世・この世などの意がある。

集落に出入りするに，東・西・南の3ケ所にトゥーリャ（通り。門）が設営されていたが，南側の門は現存しない。東の門は，アーイィゾー（東門。アーイゾー／アーゾーとも）と呼ばれているが，戦後，馬車の往来に支障をきたすということで取り壊され，新たにコンクリートの門に造り直された。西の門は，トゥーピトゥユートゥと称され，石積みの門の上に一枚岩を乗せた形態であり，旧態を残したままだという。

居住地域の北・西側は，御嶽・拝所などが存在する聖域であり，無断で立ち入ることは

図1



許されない。神女はその地域をイイィヌヤマ（西の山）とかニシィマ（根島／子島）という。

集落の前方，南側の海岸線に墓地地帯があり，パイヌシィマ（南の島）と呼ばれている。居住地の南方に位置する故の名称であろう。狩俣の人々はパイヌシィマ一帯を穢れた場所として忌み嫌らい，余程のことがなければ近づくことはなかった。

以上のように，狩俣の空間は，北には神々の世界のニシィマ（根島／子島），南には死

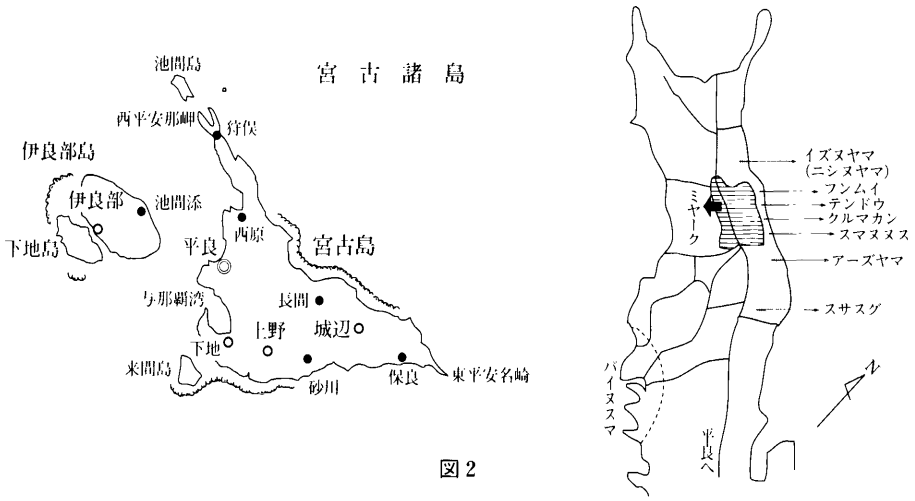


図2

者の世界であるパイヌシィマ（南の島），その中間に人間の生活空間であるミャーク（宮古）がある，という三つの空間で構成されている[1]。

3. 『御嶽由来記』にみえる御嶽由来説話

首里王府が編纂した『琉球国由来記』（1713年）の下巻（巻12～21）は，近世琉球の歴史・御嶽・諸行事の由来を地域ごとにまとめた地誌というべきものである。沖縄諸島，宮古諸島，八重山諸島の各地の御嶽・拝所や祭祀に関係する記事が主であり，島々村々で語り継がれてきた古伝承を今に伝えている。

宮古の役人が，『琉球国由来記』の基礎資料として首里王府に提出した報告書が『御嶽由来記』（1705年）である[2]。宮古最古の文献『御嶽由来記』は25の御嶽の由来・起源を記録している。その文献に収載された由来説話を御嶽の名称・記事内容につき一覧表にまとめてみる[3]と次のようになる（テキストは『平良市史』第3巻を用いた）。

御嶽名	記事内容	備考
漲水御嶽	①漲水御嶽由来（a開闢神話，b祭神神話＝三輪山型説話） ②仲宗根豊見親の事蹟	天降る神
広瀬御嶽	①広瀬御嶽由来，②与那覇勢頭豊見親の事蹟	天降る神
大城御嶽	大城御嶽由来（三輪山型説話）	天降る神
中間御嶽	①中間御嶽由来，②御嶽の神の功徳	天降る神
新城御嶽	新城御嶽由来	
池間御嶽	池間御嶽由来	天降る神
野猿間御嶽	野猿間御嶽由来	天降る神

島尻御嶽	島尻御嶽由来	
大御神御嶽	大御神御嶽由来	天降る神
船立御嶽	船立御嶽由来	
離　御嶽	離　御嶽由来	天降る神
山立御嶽	山立御嶽由来	
池の御嶽	池の御嶽由来	天降る神
高津間御嶽	高津間御嶽由来	
嶺間御嶽	嶺間御嶽由来	
浦底御嶽	浦底御嶽由来	天降る神
赤崎御嶽	赤崎御嶽由来	天降る神
西新崎御嶽	西新崎御嶽由来	天降る神
大泊御嶽	大泊御嶽由来	天降る神
川峯御嶽	川峯御嶽由来	天降る神
真玉御嶽	真玉御嶽由来	
石城御嶽	石城御嶽由来	天降る神
喜佐真御嶽	喜佐真御嶽由来	
乗瀬御嶽	乗瀬御嶽由来	
比屋地御嶽	比屋地御嶽由来	

※　上の表中①②とあるのは，同一御嶽に関し，別の異なる説話があることを示す。

『御嶽由来記』に記載された御嶽由来の用例をみてみよう。

西新崎御嶽男神高神と唱

諸願に付来間村中崇敬仕候事

由来昔神代に右神新崎山に顕れ来間島中守護の神とならせ給ひたるよし云伝有崇敬仕候事

形式的には，御嶽名・神の性別・神の名（神の機能）・祈願内容・御嶽の所在する村（島）・御嶽の由来（説話）という記載様式になっている。西新崎の御嶽の由来は簡潔である。「高神」がどのような事蹟をしたかは記されてない。伝承が途絶えた故であろうか。

「離御嶽」は，

離御嶽女神離君あるすと唱

船路の為め崇敬仕候事

由来昔神代に右神はなり山に顕れ船守の神とならせ給ひたるよし云伝有崇敬仕候事

と記されており，「船守の神」つまり航海安全の神と理解できる。

『御嶽由来記』に記載された御嶽が，どのような基準で選択・採用されたか，その理由は記録されてないが，近世期の御嶽のことを知るには貴重な文献である。『御嶽由来記』の記載に従い，御嶽の起源を整理・分類すると次のようになる。

神が降臨・顕われた場所が御嶽→漲水御嶽・中間御嶽・池の御嶽・浦底御嶽・広瀬御嶽・池間御嶽・野猿間御嶽・大御神御嶽・離御嶽・赤崎御嶽・西新崎御嶽・大泊御嶽・川峯御嶽・石城御嶽（14）

住居あるいは葬所が御嶽　→大城御嶽・船立御嶽・山立御嶽・真玉御嶽・喜佐真御嶽・比屋地御嶽（6）

根所が御嶽　→高津間御嶽・嶺間御嶽（2）

衣の袖を埋めた場所が御嶽　→乗瀬御嶽（1）

その他　→新城御嶽・島尻御嶽（2）

＊（　）内は御嶽の数を示す。

御嶽についての起源・由来譚は，内容的に大きく二つにグルーピングできよう。即ち，神の降臨と神の示顕による御嶽の起源と，神もしくは人間の住居・葬所・根所・袖を埋めた場所を御嶽のそれとするはなしである。御嶽の創設は神に由来するものと人に由来するものがあることが『御嶽由来記』から確認できる。

さて，『御嶽由来記』には25の御嶽の名・神名・機能・祈願目的も記されている。御嶽名・神名（機能）・祈願目的につきまとめてみると次のようになる（テキストは同前）。

御嶽名	神　名（機　能）	祈　願　目　的
漲水御嶽	恋角（男神） 恋玉（女神）	首里天加那志美御前御為 島中諸船海上安穏之為，諸願
広瀬御嶽	真しらへ（女神）	船路の為
大城御嶽	豊見赤星てたなふら真主（女神）	船路の為，諸願
中間御嶽	赤皿の赤台の真主（男神） 浜の里主（女神）	船路の為
新城御嶽	白鳥の舞鳥の津かさ（女神）	船路の為，諸願
池間御嶽	おらせりくためなふの真主（男神）	船路の為，諸願
野猿間御嶽	きやひかさ主（男神） おもいまらつかさ（女神）	船路の為，諸願
島尻御嶽	まひとまらつかさ（女神）	船路の為，諸願

大御神御嶽	豊見あるす（男神） 豊見かめあるす（女神）	船路の為，諸願
船立御嶽	かねとの（男神） しらこにやすつかさ（女神）	船路の為，諸願
離　御嶽	離君あるす（女神），（船守り神）	船路の為
山立御嶽	おたはる（女神）	船路の為，諸願
池の御嶽	君あるす（男神） きゆらにやす（女神），（船守り神）	船路の為，諸願
高津間御嶽	のしてた（男神）	船路の為，諸願
嶺間御嶽	あまれふら（女神） 泊主（男神）	船路の為，諸願
浦底御嶽	盛大との（男神） 豊見屋（女神），（船守り神）	船路の為
赤崎御嶽	大世主豊見屋（男神）	諸願
西新崎御嶽	高神（男神） （来間島中守護の神）	諸願
大泊御嶽	おもいまら，まつめか（二女神）	諸願
川峯御嶽	世の主かね（男神） 金めか（女神）	諸願
真玉御嶽	かねとの（男神） まつめか（女神）	諸願
石城御嶽	あからせと弓矢取真主（男神）	諸願
喜佐真御嶽	真種子若按司（男神）	諸願
乗瀬御嶽	玉めか（女神）	請願
比屋地御嶽	豊見氏親（男神）	請願

宮古地域の御嶽の神名は，明らかに人格的なものへの敬称，あるいは人名に属する名が多い。また，男神・女神の区別が記載されている。これは，沖縄地方の神名のつけ方とは異り，地域的な偏差であるとともに宮古地方の特徴ともいえるだろう[4]。

前述したように，御嶽の数は25である。その内の16は「船路の為」を祈願の目的にしている。これらの16の御嶽は宮古でもいわゆる古い集落に存在し，渚の近辺かそこから程遠くない場所に現在も位置しており，「船路の為」つまり航海安穏目的の祈願を叶えるに相応しい場にあるといえる。16の御嶽とは，漲水御嶽・広瀬御嶽・大城御嶽・中間御嶽・新城御嶽・池間御嶽・野猿間御嶽・島尻御嶽・大御神御嶽・船立御嶽・離御嶽・山立御嶽・池の御嶽・高津間御嶽・嶺間御嶽・浦底御嶽の嶽々である。つまり，これらの16の御嶽には航海安全の神が祀られると理解してよかろう。その内の14の御嶽は女神が航海安全のそれに対応しよう。

航海安全の女神を祀る14の御嶽の内，女神を航海安全の神と明記してあるのは，離御

嶽の「離君あるす」・池の御嶽の「きゆらにやす」・浦底御嶽の「豊見屋」の3女神である。他の11の御嶽の「船守の神」の神は，それぞれの御嶽に明記されている女神が相当しよう。但し，池間御嶽・高津間御嶽の祀神は男神のみが記載されているので，「船守の神」は男神となろう。

沖縄一般では航海安全の神は女神という観念があり，その意味において池間御嶽・高津間御嶽の祀神は男神が航海安全の神だとされるのは検討課題となろう。

『御嶽由来記』の「大安母みやまいりの事」(1707年・首里王府への追補報告）によれば，上記の16の御嶽で「首里天加那志美御前御為併島中作物おきなかなし上下船々為御たかへ大安母主取にて嶽々のつかさ相勤」めたようである。この文脈からすると，「船路の為」の祈願は「おきなかなし上下船々為」に行なうものであったと考えられるのである。勿論他の船旅の航海安全の目的の為にも祈られたであろう。

16の御嶽は首里王府公認の御嶽であり，沖縄地方でいういわゆるクージウタキ（公儀御嶽）であり，そこで祈願する「つかさ」は首里王府に公認された地方の神女となろう。「大安母みやまいりの事」には「御嶽拾六御前御座候津かさ拾六人有之候」ともあるので，原則として一つの御嶽に一人の「つかさ」が配置された形となる。「つかさ」＝神女は，「おきなかなし上下船々為」に各自管轄の御嶽で「御たかへ」を行なった。「御たかへ」は，航海安全の神への願い事（ニガイフチィ＝願い口）であろう。「おきなかなし上下船々」とは，首里王府への貢納物を積んだ船，即ち「春立船」と「仲立船」である。「大安母みやまいりの事」には，「春立船」と「仲立船」がいつ沖縄に向け出航するとは記してないが，春3月と夏8月の年2回の沖縄旅であったろう。「船路の為」の祈願は沖縄旅に向けての航海安全，公用が無事終了する事が目的であったと思われる。

さて，『御嶽由来記』には狩俣村の御嶽も記されていて，他村に比べるとその記載の数量は多い。狩俣村の新城御嶽の由来は次の通りである。

新城御嶽女神白鳥の舞鳥の津かさと唱

船路の為井諸願に付狩俣村中崇敬仕候事

由来昔神代に平良村仮屋側すみや山より白鳥飛出漲水に揚置候船の艫に飛移り狩俣村の上に舞行新城山の木に留りぬと見て失申候其後狩俣村いへたのまもいめかと申人に掛り我は是船守の神とならせ給ひ候由神託有て拝給申由云伝有り崇敬仕候事

「平良村仮屋側すみや山より」飛び立った白鳥は，漲水港に揚げ置いた船の艫に舞い降

りた。その後，白鳥は再び舞い上がり狩俣村の新城山の木に止まったかと思うと忽然と消えてしまった。(白鳥は神に変化し)「いへたのまもいめか」(女性) に憑依し (乗り移り)，「私は船守りの神になりました」という神託があり，それから狩俣村中で崇敬するようになった。以上が記事の大意である。

白鳥が船守の神であることは「船の艫」に舞い降りることからもある程度推察される。例えば，

お船のたかともに (ウニヌ　タカトゥムニ)	お船の高艫柱の上に
白鳥がゐいちやうん (シラトゥヤガ　ヰチョン)	白鳥がとまっているよ
白鳥やあらぬ (シラトゥヤリャ　アラン)	いやあれは白鳥ではなくて
思姉おすじ (ウミナイ　ウシィジ)	姉の霊神なのだ

という琉歌[5] があるが，これは高艫に羽根を休めているのは白鳥であるが，船守りの神であるオナリ神の化身した姿である，と理解されている。新城御嶽に祀られる女神「白鳥の舞鳥の津かさ」がオナリ神であるかはどうかはともかく，船守りの神つまり航海安全の神であることは確かなことである。ここでもう一つ留意したいことは，神が人間「いへたのまもいめか」に憑依することである。憑依することにより，神から人への言葉が神の意志を人間に伝えることになり，ここでは神の機能を語る形になっている。神託により，新城御嶽の神は航海安全の神であることは明白である。中間御嶽も航海安全の神を祀る同様の記事内容である。

同狩俣村の大城御嶽の祭神も航海安全の女神「豊見赤星てたなふら真主」としており，由来は次の通りである。

大城御嶽女神豊見赤星てたなふら真主

船路の為井諸願に付狩俣村中崇敬仕候事

由来昔神代に右神狩俣村東方島尻當原と申小森に天降して狩俣村後方大城山に住居候処あるや若男に取合かと夢を見て則ち懐胎いたし七ケ月めに一腹男女生み出父なき子なれば初めて見るものを父にせんとて抱出候得は山の前成瀬に大なる蛇這掛り彼子を見て首を揚き尾を振舞躍申候其時にてそ最前の男は蛇の変化にてあるならんと覚申候此人より狩俣村始まり候由言伝有氏神と号し崇敬仕候事

上の説話は，蛇が若い男に変化し，「女神豊見赤星てたなふら真主」の許に通ったとする所謂三輪山型の説話である。内容は天降る始祖，狩俣村の始まり，大城御嶽の由来を語るものの，航海安全の女神としての「豊見赤星てたなふら真主」の記事内容は見当たらない。これはどうしたことであろうか。同一村の御嶽即ち新城御嶽・中間御嶽・大城御嶽では「船路の為」の祈願を行なうが，新城御嶽・中間御嶽は航海安全の神を祀り，もう一方の大城御嶽は航海安全の神を祀っていることになっているが，実際には航海安全の神はいない。航海安全の神を祀る御嶽での「船路の為」の祈願は当然としても，航海安全の神を祀らない御嶽でのそれは，理に合わず必然性もない。

つまり，「豊見赤星てたなふら真主」を航海安全の女神とするのは狩俣村人の観念にはなく，また「豊見赤星てたなふら真主」の事蹟からも航海安全の女神とは言い難い。

「船路の為」の祈願は，宮古蔵元ひいては首里王府による宗教政策の一つであろうと考えられる。狩俣村とは無関係の為政者の別の論理が働いているのであった。これらのことから，『御嶽由来記』の大城御嶽の由来譚は狩俣村の神話として語られていて，18世紀の初頭に文字と出会い，その上に行政の側から「船路の為」の祈願を行なうよう指示された経緯があったものと考えられる。その意味において他の御嶽の由来に関してもフィールドワークによる洗い出しが必要である。

大城御嶽の由来譚は航海安全の女神を語る為に存在するものではなかった。女神と蛇の婚姻である三輪山型の説話を語ることがベースであり，主眼であったのだ。

さて，三輪山型の説話は漲水御嶽の由来でも語られる。

漲水御嶽弁才天女

首里天加那志美御前御為諸船海上安穏之為め諸願に付崇敬仕候事

（前略・引用者）平良内すみやと申里に富貴栄耀のひと有一人の子無きことを嘆き天に祈げれば神徳感に応て軈てはなの様成娘を儲（中略・引用者。以下同）。拾四五才の頃不覚懐胎の躰相見得父母打驚き是はいかなることそと娘得相尋候得共娘紅涙を流し答る言葉なくし（中略），頃日誰とも知らぬ白く清らかなる若男錦の衣身に纏ひ匂ひ香々して夜な夜な閨中へ忍ひ入かと見ればこゝろもこゝろならす只忙然忙然と夢の心地して跡方もなく失申候と語けりは父母不審に思ひいかにもして彼ものの行方を知らんと存，糸緒を千尋程巻其先に針を結ひ付男来侵入候はゝ首に差へくと娘へ相渡候。母如教其夜針を男の片髪に差付置夜明見れは其糸漲水御嶽の内石の洞に引入申候。たとり行見れは二三丈計なる大蛇の首に針は差置申候。（中略）

娘其夜の夢に石の大蛇枕本に来り，我は是往古此島草創の恋角の変化なり。此島の守護の神を立んとて今爰に来り汝におもいを掛申候。かならす三人の女子産みへし。其子三歳にもなるならは漲水へ抱参へしと夢を見（中略）。

日充月満十ケ月めに一腹三人の女子を産み申候。（中略）三歳にも罷成候間示現の通漲水へ抱参申候。父の大蛇両眼は如日月牙は剣を立たるやうに紅の舌を振御嶽の中より這出首は蔵元の石垣に仰き掛り尾は御嶽の石垣に振掛，喚き叫し有様おそろしき（中略）

三人共當島守護の神とならせ給ひたるよし御嶽の内に飛入掻消様に失申候。父の大蛇は光を放ち天に上り申候。

女神と蛇（男神）の婚姻を語る大城御嶽の由来に対し，漲水御嶽の伝承は恋角（男神）と人間の女性とのそれを語る蛇婿入りになっているものの，漲水御嶽の伝承は，大城御嶽の由来を語るそれと話のパターンとしては同一である。

相手の男の正体素性を知ろうとする手段として針糸を「男の片髪に差付」ける，苧環のモチーフが漲水御嶽の話ではみえ，大城御嶽の伝承ではそのモチーフがみえない。この点において伝承は著しく様相が異なる。説話学でいう蛇婿入りの話型で苧環のモチーフが見えない大城御嶽の伝承は，より古態を保っているのだろうか。『常陸国風土記』『備前国風土記』にも苧環のモチーフを持たない伝承があるからである。

ところで，『琉球国由来記』巻20にみえる「神遊ノ由来」[6]は，『御嶽由来記』の追加報告と思われるが，それには『御嶽由来記』には収載されてない記事がある。以下に，記す。

神遊ノ由来

往昔，狩俣村東方，島尻当原ニ天人ニテモヤアルヤラン，豊見赤星テダナフラ真主ト云フ女，狩俣村御嶽大城山ニ只独住居ス。赤星，有夜ノ夢ニ，若キ男閨中ニ忍入ル歟ト驚キ居ケルニ，只ナラヌ懐妊シテ，七ケ月ニ一腹ニ男女ノ子ヲ産出ス。男子ヲバ，ハブノホチテラノホチ豊見ト云。此人ヲ狩俣村ノ氏神ト崇敬仕也。女子ヲバ，山ノフセライ青シバノ真主ト云。此者十五六歳ノ比，髪ヲ乱シ白浄衣ヲ着シテ，コウツト云フ葛カヅラ帯ニシテ，青シバト云葛ヲ八巻ノ下地ノ形ニ巻キ，冠ニシテ，高コバノ筋ヲ杖ニシテ右ニツキ，青シバ葛ヲ左手ニ持チ，神アヤゴヲ謡ヒ，我ハ是，世ノタメ神ニ成ル由ニテ，大城山ニ飛揚リ行方不知失ニケル。依之，狩俣村ノ女共，年ニ一度宛大城山ニ相集リ，フセライノ祭礼アリ。夫ヨリ漸々島中相広メ，ヨナフシ神遊ト云テ，

諸村ヨキ女共毎年十月ヨリ十二月マデ，月ニ五日ケ宛精進潔斎，山ノフセライノ裳束ノヤウニシテ，昼中ハ野山ニ閉籠リ，晩景ニハ諸村根所ノ嶽々ニ馳セ集リ，臼太鼓ノヤウニ立備ヒ，神アヤゴトテウタヒ，世ガホウヲ願ヒ神遊仕タル処，何比ナラン御法度アリ。

（『琉球国由来記』1713年）

『御嶽由来記』と同内容の三輪山型の説話が前半部分には述べられるのだが，後半部分は「豊見赤星テダナフラ真主ト云フ女」の子（二世）である「フセライ」と「フセライノ祭礼」，それに「ヨナフシ神遊」について語られている。「神遊ノ由来」の「神遊」は「ヨナフシ神遊」であるが，それは「精進潔斎」した「女共」が，「毎年十月ヨリ十二月マデ，月ニ五ケ日宛」御嶽に籠る秘儀としての祭祀であった。

「フセライノ祭礼」を「夫ヨリ漸々島中相広メ」とあるが，もし字義通り「島中相広メ」たのであれば，そこには狩俣の「フセライノ祭礼」の実見者とその祭礼を伝播・普及させた者の存在と他村への介在者を必要としよう。現在でこそ他村落の祭祀を知ることができるが，前近代社会における祭祀は他村にはうかがい知られることがなく，秘密を原則とするので考え難く容易に首肯できない。実際には宮古各地に「フセライノ祭礼」・「ヨナフシ神遊」と同じ内容かもしくは類似の祭祀があったと考えられる。それを「島中相広メ」と記したのではなかろうか。現在，「ヨナフシ」という名称を冠する祭祀は寡聞にして知らない。

「フセライノ祭礼」は文脈上「ヨナフシ神遊」に包含されるが，それは現行祭祀では何に対応するかというと，「毎年十月ヨリ十二月マデ，月ニ五ケ日宛精進潔斎」すること，「白浄衣ヲ着シテ，コウツト云フ葛カヅラ帯ニシテ，青シバト云葛ヲ八巻ノ下地ノ形ニ巻キ，冠ニシテ，高コバノ筋ヲ杖ニシテ右ニツキ，青シバ葛ヲ左手ニ持チ，神アヤゴヲ謡ヒ」という点から，「ウヤガン祭祀」（ウヤーンともいう）と確定できる。『琉球国由来記』では「ウヤガン祭祀」を「ヨナフシ神遊」と記載してある。「ヨナフシ神遊」とは「世ガホウヲ願ヒ神遊」するのだから，「ヨナフシ」は「世直す／世稔す」の意であるし，即ち豊穣祈願を目的の一つとしていたのであった。

4. 狩俣のウヤガン祭祀

狩俣には九つのムトゥが（元）ある。元は血縁集団の宗家に相当し，現在は拝所とも

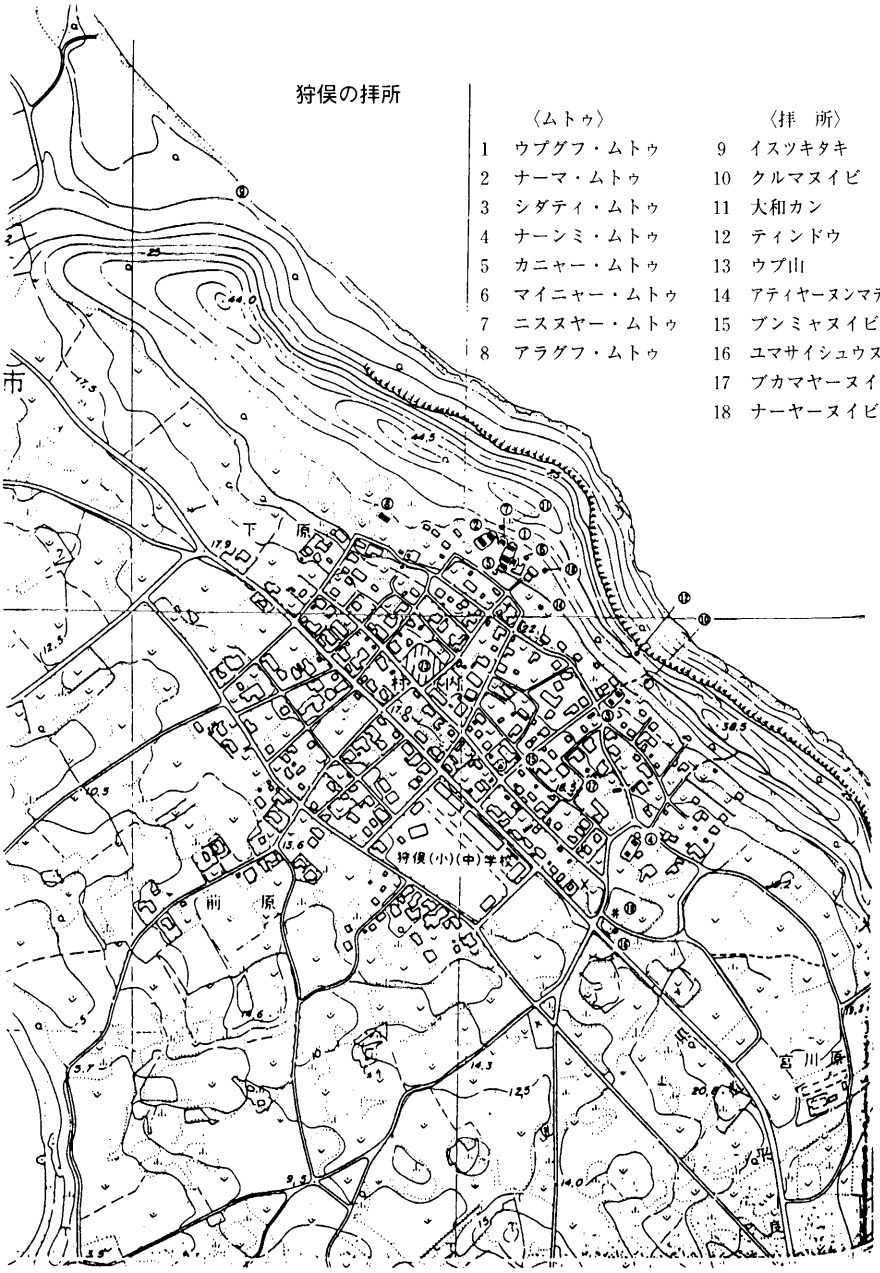


図3　［平良市史編さん委員会　1987］

なっており，宗教儀礼を実施する場ともなっている。ウプグフムトゥ（大城元。単にウプムトゥ<大元>ともいう）は村建ての神々を祀り，ナーマムトゥ（仲間元）は航海安全の神々を祀り，シダディムトゥ（志立元）は五穀豊穣の神々を祀り，ナーンミムトゥ（仲嶺元）は水の神を祀る。これらの四つの元をユームトゥ（四元）といい，狩俣の代表的な元になっている。その他，マイニャームトゥ（前の家元），ニシィニャームトゥ（西の家元），アラグフムトゥ（新城元），カニャームトゥ（カニャー元），イチィカフムトゥ（イチィカフ元）の五つの元があり，都合九つの元が存在する。マイニャームトゥ・カニャームトゥは，ウプグフムトゥの分かれ（分家筋）だといわれる。狩俣の祭祀は基本的にはムトゥ祭祀が原則である。

狩俣の神祭りは，夏祭りと冬祭りに二分される。「旧暦一月の正月願いから，旧暦十月のウトゥガウフナー（大威部ムヌともいう）までの祭り」[7] が夏祭りであり，それ以降は冬祭りである。夏祭りはそれぞれの九つの元や御嶽・拝所を中心に行なわれるが，冬祭りは，ウプグフムトゥ・マイニャームトゥ・ニシィニャームトゥの三つの元や御嶽・拝所で実施される。ウヤガン祭祀は，旧暦10月から12月にかけて行なわれるので，ウヤガン＝冬祭りの観を呈している。

ウヤガンとは親神，つまり祖先神のことであるので，ウヤガン祭祀は祖先神に深く関与する祭祀である。ウヤガン祭祀は，狩俣の他に大神・島尻でも伝承される。ウヤガン祭祀は，ジーブバナ（杖つき），イダシィカン（出す神。新しいウヤガン・神女の選出），マトゥガヤー（マトゥガヤー家での儀礼。シィマバイウヤーンともいい，村を清浄にする），アーブガー（アーブガーでの儀礼。ユークイ<世乞い>の儀礼も含む）トゥリャーギ（閉じ上げ？。終了）の五回にわたって行なわれる。各行事の目的と日時は，以下の通りである[8]。

ジーブバナは<神迎え>　旧暦10月初亥の日から午の日までの4泊5日

イダシィカン<新神女の選出／成巫儀礼>　旧暦11月初酉の日から巳の日までの5泊6日

マトゥガヤー<村の清浄>　旧暦11月申の日から子の日までの4泊5日

アーブガー<世乞い><かつての住居の訪問>　旧暦11月寅の日から辰の日までの2泊3日

トゥリャーギ<神送り>　旧暦12月初申の日から寅の日までの4泊5日

五回にわたるウヤガン祭で各回の儀礼に共通する行為は，「ウヤガンと称する神女たちがムラから聖森イズヌヤマへ入り，そこに数日間籠って所定の儀礼を務めたのち，再びムラへ降臨するという行動のパターン」[8] がみられるということである。これは，「村人たちの共通の祖先神であるウヤガンたちの降臨を儀礼的に表現することによって，ムラの再生をはかり，豊穣を予祝する」[9] ことを意味するものである。つまり，ウヤガン（祖先神）を斎く神女が，祭祀の中では祖先神ウヤガンそのものとして顕現することに大きな特徴がある。

ウヤガン祭の神女達の扮装は，フセライの扮装即ち「白浄衣ヲ着シテ，コウツト云フ葛カヅラ帯ニシテ，青シバト云葛ヲ八巻ノ下地ノ形ニ巻キ，冠ニシテ，高コバノ筋ヲ杖ニシテ右ニツキ，青シバ葛ヲ左手ニ持チ」という容姿とほとんど異ならない。となれば，「フセライノ祭礼」とはウヤガン祭の何回目の儀礼に対応しようか。「我ハ是，世ノタメ神ニ由ニテ，大城山ニ飛揚リ行方不知失ニケル」と記述されていることから，フセライが「大城山」に行くのは確かなことである。ウヤガンの2回目は「大城山」を含めた聖域に行くので，「フセライノ祭礼」は「イダシィカン<新神女の選出>」と考えられる。

さて，ウヤガンがいつの頃から開始されたか不明であるが，ウヤガンの祭祀構成が上記のように当初から五回にわたって行なわれていたかどうかは疑問が残る。

たとえば，『与世山親方宮古島規模帳』（1767年）によれば[10]，

> 諸村嶽々之儀故佐渡山親方被召定候通可致崇敬之処其外無謂嶽々崇敬ニ而造作仕候由不宜候間向後可召留事

とあり，各村の御嶽での祭祀を不要なものとして禁止している。ウヤガン祭もその例外ではなかった。

> 狩俣村の儀五拾歳以上之女三拾人程白衣裳ニ而神之真似いたし十一月は神出十二月は送と〆毎年弐度完昼夜三日山奥ニ隠居夜更候時分人目を忍大城本西之家本両所江寄合躍候旧例有之由不宜候間向後可召留事

禁止された祭祀名は記されてないものの，内容からウヤガン祭であることが判明する。興味深いことには，「十一月は神出十二月は送」と記述していることである。「神出」は，新しい神女を出すこと，即ちイダシィカン（出し神）のことであろうし，「送」とは神送

りの意であろう。神送りがあるということは，神迎えがなければならない。これらのことから，18 世紀中葉のウヤガン祭の祭祀構成は，

10 月＜神迎え＞

11 月＜新神女の選出／成巫儀礼＞

12 月＜神送り＞

と推察できよう。マトゥガヤー＜村の清浄＞とアーブガー＜世乞い／かつての住居の訪問＞は後世新たに付加したのであろうか。

5. 巡行する女神

大城御嶽は，「豊見赤星てたなふら真主」が「住居」した場所である。そして狩俣村の始りの地でもある。「豊見赤星てたなふら真主」は，ンマティダ（母太陽。ティダは神の意。母なる神）とも称され大城元に祀られる。

「豊見赤星てたなふら真主」は，島尻東方にある小森に天降りするのだが，狩俣村の大城山に移動する。その理由については文献資料は何も記してない。しかし，口頭伝承では移動・移住のいきさつについても語っている。

> 昔，ンマティダという母神がヤマヌフシライ（山で命運つきて死んだ神）という娘神を連れて，ティンヤ・ウイヤ（天屋・上屋＝天上界）からナカズマ（中島＝地上界）に降臨した。しかし，二神が降臨した地は飲み水がなく，そこから西へ移動してカンナギガー（湧泉）を探しあてた。そこの水は飲んでおいしかったが水量が乏しかった。それで再び西へ移動してクルギガー（湧泉）を探しあてた。そこは水量は豊富だったが，飲んでおいしくなかった。そこでさらに移動してヤマダガー（湧泉）を探しあてたが，そこの水には海水が混じっていた。それでさらに西へ移動し，今の狩俣の後方でイスガー（湧泉）を探しあてた。そこは水量も豊富で飲んでおいしかったので，その近くのウプフンムイ（大国森）に小屋を建てて住みつくことを考えたが，小屋を建てる途中でヤマヌフシライが怪我して死んだ。
>
> ンマティダはひとりで暮らしていかなければならなくなり，長い月日がたった。ンマティダはウプフンムイからナカフンムイ（中国森）へ住居を移して暮らすようになったが，そこへ移ってから不思議なことが起こった。毎夜，枕上にひとりの青年が座るという夢を見て，ンマティダが懐妊したのである。（中略・引用者）

その晩，いつものようにその青年がンマティダ枕上に現れ，自分はティンヤ・ウイヤから降臨した神だが，必ず男の子が生まれるだろうと言って消えた。その後，数ヶ月して本当に男の子が生まれたが，その朝，大蛇は七光を放ち，天上へ舞い上がって消えた。後世，この大蛇はアサティダと呼ばれるようになった。

アサティダとンマティダと間に生まれた子はティラヌプーズトゥユミャと名づけられ，すくすく育って立派な若者に成長した。しかし狩俣には妻とするべき女性がいなかった。そこでティラヌプーズトゥユミャは八重山へ渡り，ヤーマウスミガという女性をめとって帰ってきた。両神の間には二男一女が生まれた。

（「宮古狩俣のウヤガン祭祀」本永　清）

上記の話は狩俣の神女が口頭で語った話である。大雑把に言えば，基本的には『御嶽由来記』や『琉球国由来記』のそれと同じような創始神話である。ここで，創始神話の構成要素を確認したい。

(1)ンマティダ（母神）がヤマヌフシライ（娘神）を連れてティンヤ・ウイヤ（天屋・上屋＝天上界）から，ナカズマ（中島＝地上界）に降臨
(2)母娘による巡行と三つのカー（井泉）の発見と移動
(3)イスガーの発見とウプフンムイでの村建て
(4)ヤマヌフシライの怪我死
(5)ンマティダのナカフンムイへの住居の移転
(6)青年の登場とンマティダの懐妊
(7)男の子神ティラヌプーズトゥユミャの誕生
(8)ティラヌプーズトゥユミャの成長と八重山娘との結婚
(9)(8)の両神の間における三人の子神の誕生

この神話の主題は時間であろう。天降る始祖とその子と孫の連なり。神々の結婚と神の系譜語り。水を求めてのさすらい。定住。娘の死。結婚と出産。様々な難難辛苦を嘗め尽くした村建ての困難さ。村建てに従事した祖神の労苦を時間を軸に語っている。

上記の口頭伝承の神話では，『御嶽由来記』や『琉球国由来記』で触れることがなかった大切な事柄が述べられている。女神「豊見赤星てたなふら真主」の島尻から狩俣への移住は，実は水を求めての移動だったということである。水はあらゆるものにとって必要不

可欠な大切なもの。水はまた村建てにも祭祀にも必要であった。だから，女神「豊見赤星てたなふら真主」は各地を経巡り，質量ともに満足に足る井泉・湧泉を探すことになるのである。この女神の事蹟は，「祓い声」としてウヤガン祭の儀礼中に謡われる[11]。

祓い声

1	やふぁだりる　むむかん	穏やかな百神	フサの根口声（序章）
	はらい　はらい＜以下略＞	＜囃子。祓い祓い，の意＞	
	なゴだりる　ゆなオさ	和やかな世直さ＜大皿の名＞	
2	てぃんだオノ　みオぷぎ	天道のお陰で	
	やぐみゅーいノ　みオぷぎ	恐れ多い神のお陰で	
3	あさてぃだノ　みオぷぎ	父太陽のお陰で	
	うやてぃだノ　みオぷぎ	親太陽のお陰で	
4	ゆーチキ　みうふぎ	夜の月のお陰で	
	ゆーてぃだノ　みうふぎ	夜の太陽＜月＞のお陰で	
5	にだりノシ　わんな	根立て主のわたしは	
	やぐみかん　わんな	恐れ多い神のわたしは	
6	ゆーむとぅぬ　かんみょー	四元の神は	
	ゆーにびぬ　かんみょー	四威部の神は	
7	かんま　やふぁたりる	神は穏やかに	
	ぬっさ　ぷゆたりる	主は静かに	
8	んまぬかん　わんな	母の神であるわたしは	女神の地上への降臨
	やぐみうふかんま	恐れ多い大神は	
9	いチゆ　あらけんな	一番新しくは	
	いチゆ　ぱずみんな	一番初めには	
10	たばりジーん　うりてぃ	タバリ地＜地名＞に降りて	
	かんぬジーん　うりてぃ	神の地に降りて	
11	かなぎかーぬ　みじゅオ	カナギ井戸の水を	
	かんぬかーぬ　みじゅゆ	神の井戸の水を	
12	シるまふチ　うきてぃ	白い真口に受けて	カナギガーの発見
	かぎまふチ　うきてぃ	美しい真口に受けて（みると）	水量多いが
13	かなぎかーぬ　みずぎ	カナギ井戸の水は	味が淡い
	かんぬかーぬ　みずぎ	神の井戸の水は	↓
14	みず　うふさやイシが	水量は多いけれども	粢水にはならない
	ゆー　うふさやイシが	湯＜水＞量は多いけれども	↓
15	みず　あふぁさやりば	水は淡い＜味が薄い＞ので	移　動
	ゆー　あぱさやりば	湯＜水＞は淡い＜味が薄い＞ので	
16	シとぅギみず　ならん	粢水にはならない	
	いノイみず　ならん	祈り水にはならない	
17	まばら　むチかいし	まばらに持ち返し	クルギガーの発見
	あだか　かみかいし	あんなに（頭に）載せ返し	味は旨いが
18	うすなうし　んめい	押しに押し参られて	
	ぬイなぬり　んめい	乗りに乗って参られて	
19	くるぎかーぬ　みずゆ	クルギ井戸の水を	
	かんぬかーぬ　みずゆ	神の井戸の水を	

20 シるまふチ　うきてぃ	白い真口に受けて	水量少ない
かぎまふチ　うきてぃ	美しい真口に受けて（みると）	↓
21 くるぎかーぬ　みずざ	クルギ井戸の水は	粢水にはならない
かんぬかーぬ　みずざ	神の井戸の水は	↓
22 みず　んまさやイシが	水は旨いけれども	移　動
ゆー　んまさやイシが	湯<水>は旨いけれども	
23 みず　いきりゃがりば	水量は少ないので	
ゆー　いきりゃがりば	湯<水>量は少ないので	
24 シとぅギみず　ならん	粢水にはならない	
いノイみず　ならん	祈り水にはならない	
25 まばら　むちかいし	まばらに持ち返し	
あだか　かみかいし	あんなに（頭に）載せ返し	
26 やまだがーぬ　みジざ	山田井戸の水は	ヤマダガーの発見
かんぬかーぬ　みずざ	神の井戸の水は	水量多いが
27 みず　うふさやイシが	水量は多いが	海水混じり
ゆー　うふさやイシが	湯<水>量は多いが	↓
28 いんきらり　みずりば	海に通う水なので	粢水にはならない
シーきらり　みずりば	潮が通う水なので	↓
29 シとぅギみず　ならん	粢水にはならない	移　動
いのイみず　ならん	祈り水にはならない	
30 まばら　むちかいし	まばらに持ち返し	
あだか　かみかいし	あんなに（頭に）載せ返し	
31 うシなオし　んめい	押しに押し参られて	
ぬイなのり　んめい	乗りに乗って参られて	
32 シまシずざ　さだみ	島の頂を定めて	
ふんシずざ　さだみ	国の頂を定めて	
33 いソがジーん　うりてぃ	磯井の地に降りて	
かんぬかーん　うりてぃ	神の井戸に降りて	
34 いソがかーぬ　みジざ	磯の井戸の水を	
かんぬかーぬ　みジざ	神の井戸の水を	
35 シるまふチ　うきてぃ	白い真口に受けて	
かぎまふチ　うきてぃ	美しい真口に受けて（みると）	
36 いシがかーぬ　みずざ	磯の井戸の水は	
かんぬかーぬ　みずざ	神の井戸の水は	イスガーの発見
37 みず　いきりゃがりばまい	水量は少ないけれど	水量少ないが
ゆー　いきりゃがりばまい	湯<水>量は少ないけれど	味は旨い
38 みず　んまさやりば	水は旨いので	↓
ゆー　んまさやりば	湯<水>は旨いので	粢水になる
39 シとぅギみず　なりよ	粢水になるのだ	↓
いのイみず　なりよ	祈り水になるのだ（そこで）	定　住
40 ジジむゆーイ　のよりよー	頂杜に登って	
ジジざキん　ノゆりよー	頂崎に登って	
41 シまにまイ　トりょり	島根の方をとって	
むらにまイ　トりょり	村根の方をとって	
42 うイジみさやイシが	居り心地はよいのであるが	
ふんジみさやイシが	踏に心地はよいのであるが	

43 とぅらぬふぁぬ　かじぬ　　寅の方の風が（吹いたら）
　かんぬにーぬ　かじぬ　　神の根の風が（吹いたら）
44 いんなイぬ　オトロ　　海鳴りが恐ろしい
　シーなイぬ　オトロ　　潮鳴りが恐ろしい

（引用は『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』）

「祓い声」の内容は，水を求めての移動であり，最終的には狩俣のイスガーを発見する。イスガーの水量は少ないけれど，水が旨いので住むに適した条件なのでそこに住む決意をする。水量は少ないけれど，水が旨いのはクルギガーも同じ条件なのに，何故そこには住まなかったのか。イスガーの水は粢水になる（神酒造りに適している）が，クルギガーの水は粢水になれない，と水質を問題にし，イスガーを選択している。

「祓い声」では蛇との婚姻については謡っていない。狩俣の祭祀歌謡のなかには蛇，つまりアサティダ（父太陽。父なる神）は登場してこない。文献・口頭伝承で語られるのみである。いずれにせよ，「祓い声」は創始神話そのものの内容を伝承している。

狩俣のウヤガン祭は時を経ても神行事の中で繰り返された。時は未来へ向かうのに祭りは常時＜始まり＞に立ち返る。ウヤガン祭の本質は始原への回帰にある。ウヤガン祭で「祓い声」を謡うことは，始原への回帰，つまりは自らの出自の再確認であるとともにウヤガンが祭祀で再生することでもある。女神ンマヌカンは始原へ回帰する装置の基軸であるようだ。

注

1）本永清，1973「三分観の一考察―平良市狩俣の事例」『琉大史学』第4号　琉球大学史学会
本永清，1991「宮古狩俣のウヤガン祭祀」『神々の祭祀』所収＜環中国海の民俗と文化二＞凱風社

2）平良市史編さん委員会，1981『平良市史』第三巻資料編1前近代　平良市教育委員会
引用に際し，旧漢字は新漢字に，カタカナはひらがなに改めた。また句読点も施した。

3）波照間永吉，1998「『琉球国由来記』の説話関連記事（覚書）」（『沖縄学』2号　沖縄学研究所）を参考に表を作成した。

4）比嘉政夫，1976「『琉球国由来記』にみる地域差―御嶽の神名などをめぐって」南島史学会編『南島―その歴史と文化1』国書刊行会

5）引用は，島袋盛敏・翁長俊郎，1968『標音琉歌全集』（武蔵野書院）を用いた。

6）引用は，外間守善・波照間栄吉編，1997『定本　琉球国由来記』（角川書店）を用いた。

7）外間守善・新里幸昭編，1978『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』角川書店

8）日本放送協会［編］1990『日本民謡大観（沖縄・奄美）宮古諸島篇』日本放送出版協会

9）本永清 1991,「宮古狩俣のウヤガン祭祀」植松明石編『神々の祭祀』＜環中国海の民俗と文化二＞凱風社

10）注2）に同じ

11）「祓い声」は，ウヤガンの2回目のイダシィカンと5回目のトゥリャーギでウヤガン（アブンマ）により謡われる。イダシィカンとトゥリャーギで謡われることは，「祓い声」と儀礼との強い結びつきを意味しよう。このことは，18世紀中葉のウヤガン祭の祭祀構成を，「10月＜神迎え＞11月＜新神女の選出／成巫儀礼＞12月＜神送り＞」と想定した筆者の仮説を保証しよう。

また，『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』所収の「解説　宮古の歌謡」（外間守善）では，「祓い声」は52節で終わっているが，その後にも詞章があったとし，「ところがそこは潮風が当たるので，南の方に家を移したというのである。（中略・引用者）おそらくさいごの1，2節は脱落したのであろう。伝説としてはそのあとの部分も伝わっている」と明記している。内田順子氏は「1995年11月29日」のイダシィカンでの演唱でその詞章があることを立証した（『宮古島狩俣の神歌――その継承と創成』参照）。

【付記】

本稿は，2000年10月29日（日）に慶應義塾大学地域研究センター主催の国際シンポジウム『東シナ海周辺の女神信仰』で口頭発表したものである。

宮古方言は，原則としてカタカナ表記を用いた。特殊な音【ī】【sī】【tsī】はイィ・シィ・チィとした。

参考文献〔五十音順〕

稲村賢敷　1957『宮古島庶民史』稲村賢敷発行
――――　1962『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書
上原孝三　1990「女神“山のフシライ”をめぐって」『沖縄文化』第73号　沖縄文化協会
内田順子　2000『宮古島狩俣の神歌――その継承と創成』思文閣出版
岡本恵昭　1971「宮古島の祖神祭――狩俣・島尻を中心として」『まつり』第17号，まつり同好会
奥濱幸子　1997『暮らしと祈り――琉球弧・宮古諸島の祭祀世界』ニライ社
――――　1998「祭祀と環境――宮古狩俣村落（スマ）の神行事を通して」『沖縄女性史研究』第2号　沖縄県教育委員会
狩俣康子　1991「狩俣の神歌」『南日本文化』第23号　鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
島袋盛敏・翁長俊郎　1968『標音琉歌全集』武蔵野書院
新里幸昭　1978「狩俣部落の神祭りと年中行事」外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』角川書店
――――　1980「狩俣の神々――タービ・ピャーシをもとに」『沖縄文化研究』7　法政大学沖縄文化研究所
日本放送協会〔編〕　1990『日本民謡大観（沖縄・奄美）宮古諸島篇』日本放送出版協会
波照間永吉　1998「『琉球国由来記』の説話関連記事（覚書）」『沖縄学』2号　沖縄学研究所
比嘉政夫　1976「『琉球国由来記』にみる地域差――御嶽の神名などをめぐって」
――――　南島史学会編『南島――その歴史と文化1』国書刊行会
比嘉康雄　1991『遊行する祖霊神［ウヤガン・宮古島］』＜神々の古層三＞ニライ社
平良市史編さん委員会　1981『平良市史』第三巻資料編1前近代　平良市教育委員会
古橋信孝　1991「神謡・神話の発生――宮古島狩俣を中心に」『現代詩手帖』10月号　思潮社

外間守善　1978「宮古の歌謡」外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』角川書店
――　――　1978『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』角川書店
外間守善・新里幸昭編　1972『宮古島の神歌』三一書房
外間守善・波照間永吉編　1997『定本琉球国由来記』角川書店
本永　清　1973「三分観の一考察――平良市狩俣の事例」『琉大史学』第4号　琉球大学史学会
――――　1991,「宮古狩俣のウヤガン祭祀」植松明石編『神々の祭祀』<環中国海の民俗と文化二>凱風社
――――　1994,「神話・儀礼・神歌――宮古狩俣の事例から」古橋信孝他編『都と村』<古代文学講座三>勉誠社